

立川談志 (本名・松岡克由)
たて かわ だん し

1952年 東京高校中退
同 年 柳家小さんに入門
1963年 五代目立川談志襲名、真打となる
現 在 東京落語協会会員、現代センター所属
現住所 東京都文京区小石川2の3の4
川田ビル内 現代センター気付。

現代落語論

定価 260 円

1965 年 12 月 6 日 第 1 版発行

著 者 © 立 川 談 志
1965年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 株式会社 三 陽 社

製 本 所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 東 京 (291) 3131 ~ 5 番

振 替 東 京 84160 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 507

現 代 落 語 論

立 川 談 志 著

三 一 書 房

まえがき

“キミのふだんよくしゃべっている能書きっていうのはなんかおもしろいから、ひとつ本にまとめていいたいことをいったらどう……?” と三一書房の畠山氏からいわれたのがざっと今から二年前。物事何でも安直に受け合う性分だから、

“本を? わたしの本を出してくれるの、イイネ、ごきげん、やりましょう。書きゃ、いいんでしょう”

とはじめたようなものの、イヤハヤ、どうしてどうして、バーで酔っぱらって他人の悪口をいってるのとワケが違ふ。書く、という労力プラス、それをまとめることのムズかしさ。

一時間の漫談を演ってくれとか、二時間落語についてしゃべってくれ、なんてのは、明日にもできるが、サテそれを本にする、ということのたいへんなこと。もちろん文章なんてまるでわからない素人だから、ひとつのリズムでつづっていくわけなのだが……。

どうやったらいいのか、これがカイモク、わからない。二年目の今年の夏から秋にかけてはいささか、ノイローゼになり、“ヤアーメタ”と何度も放り出そうと思ったのだから、いいかげんなものだ。

落語について、いいたいことは山ほどあるし、落語をよく知らない人には、

“こないいいものなんだヨ”

と教えてあげたいことも数多くある。

早い話、お客さんと話をした方が、よくわかってもらえるだろうし、また楽しく笑いのうちに“現代の落語ってナァ”と聞かせることもできる。

しかし全国のお客さんてなると、やはり本に書かなくてはなるまいし……。

外人に向って、カタコトの英語で語りかけているようなもんで、単語をならべ、妙な形容詞を使いながらもなんとか相手に自分のいつていることをわかってもらおうとする努力……。

“キミのフランス語でよくなんとかなったネ”

“オレは大丈夫だったが、相手が困ったらしい”

てな小咄が、そっくりそのまま当てはまる。

でもこうやって一冊の本になってみると、正直、無性にうれしい。いいもんだ、第一、装ていが立派だ。

同じアパート住いでいたヨシミで長尾みのるさんが引き受けてくれ、橘右近さんがピラ字を書いてくれた。本棚にかざっとくだけでも結構立派なはずだと思う。

談志十八番

黄舎大黒 蜀山人お血脈
雑 非ずつこけ 三右衛門漬
南瓜屋 大工調へ 山車屋
六尺棒 獲兵衛狸寝 床
らくだのなまき屋 山心中
瀧前篇 天 災 平家物語 平家

三鞭草 山敷
 三鞭草 金馬
 三鞭草 山柳枝
 三鞭草 圖生
 三鞭草 秀生
 三鞭草 炎繁
 三鞭草 炎治
 三鞭草 百生
 三鞭草 馬風
 三鞭草 山炎治
 三鞭草 三鞭草
 三鞭草 柳邦
 三鞭草 可樂
 三鞭草 三木助
 三鞭草 圖樂
 三鞭草 權太
 三鞭草 今輔
 三鞭草 柳橋

その一

落語の観方聞き方

九

その二

真打ちになるということ

七三

噺のおもしろさ 落語の落げ 「地口落ち」 「考え落ち」
 「見立落ち」 「幽霊落げ」 落げの演出法 噺のスター
 笑い三態とギャグ ケチはケチなりに、泥棒は泥棒なりに
 間抜けの楽しさ 寄席のエリート 講談と落語 落語
 のルール 郷愁と夢 素朴・正義感・四季 艶笑落語
 艶物復活 女性に艶物がお好き 艶物演出法 廊下
 ついて 色物について 音曲について
 浅草松竹演芸場 映画『大平原』に感激 多摩川園劇場
 少年講談 寄席通い はじめて志ん生をきく 三遊亭
 歌笑の死 落語は非行化を救う みつともないから、ヤ
 メテクレ 真山恵介さんとの出会い 小さん師匠の家
 小よしの誕生 ふしぎな世界 前座・二つ目・真打
 前座の修業 ワリの話 楽屋帳の話 落語の題名につ
 いて 出番のやりくり 予備出演ということ 師匠を
 真似ること バケた林家三平 イジられる話 楽屋で
 博打はご法度 鯛焼に泣く 怒鳴られる奴ほどもものにな
 る 初高座 無言のルール 噺のケイコ場 月謝な
 しに噺を教わる 十八歳で二つ目になる 自分の落語を
 つくりだす 湯浅喜久治とのこと 古典落語のセンスと

秋失篇	三篇草	山圖朝
有くお相前		
不動坊	桂	変活
大鐘辰吉		
組惣長屋	柳家	山又
ねらみ屋		
ゴム屋	三桂家	山勝
妻の釣		
花	春風亭	柳枝
王五の編		
煙の釣	林家	正鶴
火事屋		
藤	春風亭	柳邦
野		
全戸焼	三笑亭	可樂
三万二両損		
へつり	桂	三木助
餅屋		
餅屋島屋	三笑亭	圓樂
狂歌家王		
石の園	柳家	権太
餅屋金屋		
餅の張屋	古今亭	今輔
馬の田樂		
餅取	春風亭	柳橋
山宮東兵衛		
市助橋	笑福亭	杉鶴
高津の富		
代書屋	桂	春風亭
野崎留		
いさすの張	桂	米朝
池田の結實		
屋清炎	古今亭	亮朝
屋良敷		
藤屋	三笑亭	圓義
落語家の話		

その五

落語の笑いと言	古典落語は泣いている	スパゲツ
テイの伴奏	客席のエチケツト	笑わせない工夫
い笑いを教える	落語はどうなるか	い
わたしの落語論		二三九
新作落語は落語ではない		二四一
上方落語と大阪の寄席		二五〇
テレビ落語		二五五
落語家が売れるということ——マスコミと落語		二六三
落語一筋は昔のこと	わたしたちの前にはマスコミがある	
二足の草鞋ははける	落語は果して大衆的か	芸の保護
と大衆化	器用でないと生きられない	貧乏は芸を滅ぼす
無料でも客は客	現代の落語家	

カバ―および中扉カッタ 長尾みのる
目次扉および目次カッタ 橘 右近

その一
落語の観方聞き方



噺のおもしろさ

“三太夫”とお殿様が呼ぶ。
“ははっ!”とご家老。

“今宵は十五夜であるな”

“御意にござります”

“お月様はでたか?”

“これはしたり、お月様とは下々の申すこと……、殿はご大身ゆえ、月は月と、呼び捨てがよいと存じます”

“さようか、しからば月はでたか”

“一点隅なく呀え渡ってございます”

“……ウム、して星めらは……”

とこの会話のやりとり、一口にいうとこれが落語というものだ。

この小噺のもつ得もいわれぬのんびりとした、お殿様ならではの豊かな言葉、この小噺は落語の代表としていってもいいくらいである。

このお殿様は、真赤なご門のあるお屋敷に住んでいて、名前が赤井御門守様といい、禄高は、一二万三千四百五十六石七斗八升九合とひとつかみ。

このひとつかみ、というところが何ともいえない噺の味のひとつになっていて、ご家老は田中三太夫とほとんときまっている。

落語にでてくるお殿様役は、だいたい彼の一手販売ということになっている。

おつるという町娘を見染めて愛妾にし、その兄の八五郎を屋敷に招いて、ついにはこれをご家来にとり立てるといふ『妾馬』。

姉が死んだと三太夫にいわれ悲しみ、あとでそれが間違いだったということに怒るお殿様は、三太夫に切腹を申しつけ、ややあって、

“三太夫、切腹におよばぬ、よく考えてみたら余に姉はなかったわい”
という『松引き』。

古物コレクションに目をつけたインチキ古道具屋の吉兵衛から、初音の鼓を買わされる『初音の鼓』。

吉原のおいらんに惚れ、お国元へ帰ってからもおいらんと杯のやりとりをやるために家来が、江戸とお国元を往復する『杯の殿様』。

将棋に凝って家来を悩ます『将棋の殿様』等のお殿様の役どころは、ほとんど彼赤井御門守が演じている。

そしてそのつど、ご家老の田中三太夫はおつきあいに引っぱりだされている。

先きほど紹介をした、“星めら……”のような小噺を、大名小噺といい、同じ大名小噺の中に『桜鯛』というのがあって、お殿様が食事をする時にはかならずお膳にはお鯛がつき、食べる、食べないにかかわりなく、しきたりになっているという。

ところが、ある日のこと、何の気まぐれか、この鯛の塩焼きにお殿様が箸をつけた。一箸つける和家人にむかつて、

「美味である、替りをもて」

ときた。

どっこい、いつものとおりで、鯛なんか食べあきているだろうし、ただみるだけで箸なんかつけないと思っているから、スベアがなかった。

とっさの気転で、家人が、

「殿、庭の桜が満開でいちだんとみごとでございます」

「おお、さようかな、咲いたな。みごとであるな」

とお殿様が桜にみとれているうちに、手を延ばして、お膳の上の鯛をくるり裏と表を引っくり返した。

「替りをもて……、おお、きておるか」

といいながらお殿様、また一箸つけて、

「替りを」

ときた。

あア、今度は困った。もう引っくり返すわけにはいかない。家人一同困っていると、これをみたお殿様、

“いかがいたした。替りはまだか、ならばもう一度桜をみようか……”

じつによくできた小噺で、わたしたちもよくおなじみの『目黒の秋刀魚』などのマクラに使う小噺の一つで、星めら……に匹敵する大名小噺の代表作である。

ところがこの二つの小噺を何度も聞き込んでくると後者の『桜鯛』の方には、なにか作者の作意というか、作った人の顔がチラリとでてきているような気がする。つまり、

“どうです、おもしろいでしょう。イキなお殿様でしょう”

という作者の声が聞こえそうな気がするのだ。

しかし、笑いの度合いからくらべてみれば、だんぜん後者の方が高いし、また噺としての構成も『桜鯛』の方が秀れてはいる。

しかしこれが落語としての、また、大名小噺としての見地からするとガゼン “星めら” の方が冴えてくる。

この笑いのニュアンスを理解しているかどうかで現代の落語家としてのセンスが、あるかないかが決定する、といっても間違いはないと思う。

この小噺にでてくる殿様の顔を想像し、この種の噺を演じてくれる落語家のよさとその演出力、それにプラステクニクとその芸人のもつ豊かさ。これらを寄席の客席で直接に自分の皮膚で感じとるようになる。と一人前以上の落語通ということになる。

ところが皮肉なことに、意外にこれを演じる側の方に落語通がすくないのだ。

落語の落さげ

“落語って、なんですか”

“落語と漫談はちがうんですか”

“二人でやるのが漫才で、それを一人で演るのが落語でしょ”

“講談とは、どう違うの”とか、いろいろと落語について、じつに多くの人たちに聞かれる。が、まアかんたんにいえば、落語とは、つまり落ちのあるはなし（噺）、ところなる。

この落ちのことをわたしたちは落さげといっているが、この落さげのある噺が落語である。

しかし中にはその内容をみた時には完全な落語ではあるが、落さげのない落語もある。

ただその噺に落さげがない、というだけで、人情噺なんかにはまア落さげのないのが多い。

だから落語といっても、落さげのある落語と、人情噺のように落さげのない落語の二た通りに大別することができる。

だが近頃のように、十二、三分で一つの落語を演じるようになって、落語を途中から始めて、途中で終るといふようなケースが、放送ばかりではなく、寄席にでもよくある。

“落さげがないけれど、これもやはり落語ですか？”

と聞かれると、

“まア、そうです。落語です”

と一応は返事をするが、何かひっかかる。